

力による秩序概念や秩序の方法を解体しようとしていたともいえる。近代的な高等師範学校で規律訓練的な教育を受けたバンナーは、その経験を同胞団という組織作りに役立てた。同胞団においては、組織運営において規律訓練が重視され、勤勉なメンバーが多く創出された。この人的資源における強みが、20世紀前半における同胞団の急速な発展の一因であった。植民地権力のつくった秩序の枠内で、バンナーは教育を受け、同胞団は誕生・発展した。この意味において、同胞団は植民地主義の産物のひとつであると位置づけることも可能であろう。このように、本書は一見関係なさそうな同胞団という研究対象についても、新たな視点を与えてくれる有益な書である。

原著の刊行からすでに20年以上が経過しているが、その内容は決して色あせておらず、本書は今なお重要な「古典」として必読の書である。原著は、日本語以外にも、アラビア語、ドイツ語、ポーランド語、トルコ語へ翻訳されており、世界で幅広く読まれている。このことから、本書の重要性がうかがえる。繰り返しとなるが、エジプト研究のみならず、中東研究の必読書である *Colonizing Egypt* の邦訳が完全な形で出版されたことは僥倖である。本書に初めて触れる方はもちろん、すでに原著を読了済みの方々もこの本書を読み返していただきたい。必ずや、この名著から新たな発見をえることであろう。

<参考文献>

al-Bannā, Ḥasan 1996. *Majmū'a al-Rasā'il al-Imām al-Shahīd Ḥasan al-Bannā*, Alexandria: Dār al-Da'wa.

(横田 貴之 日本大学国際関係学部准教授)

小杉泰・林佳世子(編)『イスラーム 書物の歴史』名古屋大学出版会 2014年 472頁

「ムスリムはクルアーンしか読まない」という偏見は少なくなった。ムスリムが書いた様々な書物も和訳されている。しかし、それらの和訳が、ヨーロッパや中国の書物の和訳ほどに読まれているとは言えない。イスラームに関する事柄を研究する者にとっても、約1400年の長い歴史と、東・東南アジアからアフリカ・ヨーロッパに至る広範な地域で展開した、ムスリムの書物文化の全体を通観する機会は多くはない。「イスラームの書物」(本書2頁)の歴史を、人類の書物の歴史の重要な一部として、7世紀のイスラームの到来からデジタル化が進展する今日まで通観しようとする本書は、一般読者に「イスラームの書物」の豊かな世界を紹介し、研究者には、日々の研究で扱う文献が、どのような書物文化の一部であるのかを認識させてくれる。また、書物の内容だけでなく、文字や紙、写本の装丁といった、内容を伝えるモノに注目していることも興味深い。

本書は3部で構成され、冒頭に、小杉泰による「はじめに 光は東方から——文字と書物の水脈」が置かれる。ここでは、本書全体の目的、すなわち、グーテンベルグ(1468年没)による活版印刷の「発明」を画期とする西洋中心的な書物の歴史に対して、活版印刷の導入は遅れたものの、豊かな写本文化が展開した「イスラームの書物」の歴史を解明することで、グローバルな視点から人類の書物の歴史に対する視野を拡張することが語られる。

この目的を踏まえて、第1部「イスラーム文明と書物文化の隆盛」は、預言者ムハンマド(632年没)の時代からアッバース朝前期(8～10世紀)までを中心的に扱う。ここでは、クルアーンのウ

スマーン版ムスハフの成立、紙の伝播と普及、アラビア文字と正書法の確立を論じ、「イスラームの書物」の中核的要素と本書が規定する写本文化の形成と発展を跡づける。また、ペルシア語やトルコ語といった、ムスリムが使用してきたアラビア語以外の言語へのアラビア文字の導入・拡散も取り上げる。

第Ⅱ部「華麗なる写本の世界」では、アッバース朝後期(10～13世紀)から18世紀頃までに重点を置き、写本の装丁や装飾、挿絵、書体・書道といった芸術的要素から写本文化の多様な展開を紹介する。同時に、書物の内容や編纂過程にも踏み込み、神秘家(スーフィー)の書物が語る修行論や、ギリシア系科学のアラビア語への翻訳・展開・伝播を解説し、歴史書の編纂をめぐる知的実践から歴史家同士の人間関係をも描き出していく。

第Ⅲ部「現代から未来へ——写本・印刷本・デジタル本」では、現在まで写本がどのように流通・保存されてきたかと、研究者の体験に基づく写本研究の苦勞と喜びが語られた後で、近代化の一環として19世紀に本格的に導入された活版印刷の影響と、現在進行しているデジタル化を論じる。そして最後に「あとがき」が付されて全体を締めくくる。以下に、各章の執筆者と標題を列挙する。

第Ⅰ部第1章：小杉泰「イスラームの誕生と聖典クルアーン」、第2章：清水和裕「製紙法の伝播とバグダード紙市場の繁栄」、第3章：竹田敏之「アラビア語正書法の成立」、第4章：小杉麻李亜「写本クルアーンの世界」、第5章：清水和裕「イブン・ナディームの『目録』」、第6章：東長靖「アラビア文字文化圏の広がり」と写本文化」。

第Ⅱ部第1章：後藤裕加子「書物の形と制作技術」、第2章：竹田敏之「アラビア書道の流派と書家たち」、第3章：ヤマンラール水野美奈子「書物挿絵の美術」、第4章：山本啓二「イスラーム科学の写本」、第5章：中町信孝「アラブの歴史書と歴史家——マムルーク朝時代を中心に」、第6章：東長靖「神秘家たちの修行と書物」、第7章：後藤裕加子「サファヴィー朝のペルシア語写本」、第8章：小笠原弘幸「オスマン朝の写本文化」、第9章：林佳世子「オスマン朝社会における本」、第10章：真下裕之「ムガル朝インドの写本と絵画」。

第Ⅲ部第1章：三浦徹「イスラーム写本の流通と保存」、第2章：大稔哲也「写本研究の愉しみ(1)——アラブ史の現場から」、第3章：永田雄三「写本研究の愉しみ(2)——オスマン朝史の現場から」、第4章：林佳世子「イスラーム世界と活版印刷」、第5章：小杉麻李亜「聖典の刊本とデジタル化」、第6章：小杉泰「デジタル時代の古典復興——アラビア語メディアを中心に」。

上掲の章の一覧から明かなとおり、本書では、「イスラームの書物」をめぐる様々な事柄が多角的に論じられる。なかでも高く評価されるのは、竹田敏之の2章と林佳世子の2章である。

竹田の2章はアラビア文字を扱う。第Ⅰ部第3章(「アラビア語正書法の成立」)は、子音を表す線(ハット)だけであったアラビア文字に、同一の線形で表される複数の子音を判別し、母音を記録するために点・記号が導入された経緯をたどり、書記と文法家がより正しく合理的な綴りを求めて変化・洗練させた「類推型正書法」と、その正書法が確立する前に確定されたウスマーン版ムスハフのハットの保存と、読誦のための母音記号に関するラスム(跡)論を解説する。第Ⅱ部第2章(「アラビア書道の流派と書家たち」)では、アッバース朝期からオスマン朝後期までの期間に、イランからマグリブにかけての地域で活躍した書家たちを取り上げ、彼らの作品と書道理論、流派と書体を論じる。

写本研究において、文字と書体の判別が基本であることは言うまでもないが、それらの成り立ち

や理論を知ることには少ない。竹田の2章は、写本研究の基礎を支えながら、歴史学などの研究者には、体系的に得る機会の少ない文字に関する知見を簡明に提供してくれる。また、文字という一見地味な主題を、浩瀚な史資料を駆使した精彩に富んだ記述で、実証的に論じていることも高く評価される。史資料に密着した冷静な筆致は、アラビア文字や書道をことさらに称揚するものではないが、かえって説得的であり、著者のアラビア文字に対する深い敬意と愛着も滲む。

一方、林佳世子の2章は、16世紀から19世紀のオスマン朝社会を中心的に取り上げる。第Ⅱ部第9章(「オスマン朝社会における本」)は、18世紀までの書物の普及と種類の分布を分析し、書物の生産と利用が富裕層、特にウラマーに偏っていたことを指摘する。そのため、イスラーム諸学の古典注釈が多く書かれ、講読と書写によって流通・利用・蓄積されていた。ウラマーは、学問的活動に書物の生産・流通・利用の循環を組み込み、書物に対する需要を満たしていたため、印刷を導入する必要性が19世紀に至るまで薄かったのである。第Ⅲ部第4章(「イスラーム世界と活版印刷」)は、その19世紀における印刷の本格的導入を解明する。イスタンブルでは、16世紀にアルメニア人が印刷所を開設し、18世紀にはムスリムによっても開設された。しかし、なかなか採算がとれず、19世紀前半に近代化政策の一環として官立印刷所も設立されるが、印刷出版業界が採算ベースに乗り、印刷が一般化したのは、雑誌や新聞という量産が不可欠のメディアが登場した19世紀後半であったという。

本書の「はじめに」で述べられているとおり、ムスリム社会への印刷の導入が遅れた原因として、しばしば、イスラームの保守性やムスリムの文化的後進性があげられてきた。これに対して林は、書物の生産・流通形態と需要と供給という側面から、印刷導入の遅れは「量産を必要とするような本への需要がなかったことにつくる」(353頁)ことを明らかにした。この議論は、ムスリム社会への印刷導入の経緯を歴史的・実証的に考察したことで、「イスラームの書物」の歴史を通観する本書全体に重要な位置を占める。さらに、ある宗教に先進性や後進性を付与し、その宗教の信徒の行動をそれによって語る本質論的説明を批判した点で、イスラームと書物、より広くは、宗教と文化の関係を考える上で有益な材料を提供している。

ただし、林の分析は、書物に対するイスラームの消極的な影響も示唆する。書物の大量生産に対する需要がなかったことを、小杉泰は「多品種少量生産を効率的にこなす市場が成立していた」(1頁)と評価するが、書物のジャンルの多様性や読書の社会的広がりから見ると別の側面がうかがえる。すなわち、書物の生産と利用がイスラーム諸学に集中したため、同じような書物が繰り返し生産され、娯楽作品から教養文学、世俗的な思想書などが数多く生産されて、上層階級から民衆まで、幅広く読まれる状況にはなかなか至らなかったと考えられるのである。

本書で詳述されているように、ムスリム社会では、イスラームとは直接関わらない詩文や説話、科学に関する書物も書かれてきた。とはいえ、林の分析が示唆するように、それらの書物が広く出回っていなかったとするならば、活版印刷の普及によって、王侯から民衆までが様々な読書を実践していた近世ヨーロッパ、あるいは、木版印刷によって経典から白話小説や仮名草子まで多種多様な書物が安価に出版され、町人が書物に親しんでいた近世東アジアのような状況は、ムスリム社会においては、19世紀後半まで出現しなかったと言わなければなるまい。本書を読み進めていく中で次第に気になる点は、イスラームが書物に与えた影響のうちで、このような否定的に捉えられような側面を薄めているように思われてくることである。

また、『イスラーム 書物の歴史』という表題の「イスラーム」と「書物」の間のスペースに込

められた含意が不明瞭であり、「イスラームの書物」とは何かも最後まで判然としない。クルアーンとイスラーム宗教諸学の書物は、当然「イスラームの書物」であるが、第Ⅱ部でしばしば取り上げらる『王書』などは、「イスラームの書物」と言えるのだろうか。第Ⅲ部第6章(小杉泰「デジタル時代の古典復興」)では、近代アラビア語文芸運動を主導したキリスト教徒知識人を取り上げるが、彼らが書いた書物は「イスラームの書物」なのだろうか。古典作品を写本から翻刻・校訂して印刷・刊行する過程について、東洋学者の功績にほとんど言及していないことも穏当ではない。

何より、「西欧に比べて活版印刷の導入は遅れたけれど、豊かな写本文化があった」という立論が、イスラームと書物の歴史を語るのに有効とは思えない。そこには、西欧中心主義を批判し、グローバルな観点から人類の書物の歴史を拡張しようという意図が込められており、その意図に異論はない。しかし、西欧と比較・対抗させることは、西欧中心主義の裏返しであるし、ジャーヒリーヤの野蛮からイスラームの文明へという教条的な歴史認識に無批判に乗っかることは、西欧中心主義に対してイスラーム中心主義を打ち立てることにしかない。

西欧中心主義を批判し、人類の書物の歴史を拡張するという目標を達成するためには、各地域・時代の文化は歴史的に形成・変容し、それぞれ固有の価値を持つという歴史主義と文化相対主義に基づくべきである。そして、史資料への沈潜と批判的分析に依拠した慎重で冷徹な考察からこそ、「イスラームの書物」が人類の書物の歴史に持つ固有の価値が浮かび上がるのではないだろうか。

イスラームの影響下で展開した書物の文化を網羅し、人類の書物の歴史の一部としてイスラームと書物の関係を考察することは、本書一冊で完遂できることではもちろんない。ここまで紹介・批評してきたように、本書は、詳細な事例分析から「イスラームの書物」に関する豊富な知見を提供する。それらの知見は、本書の批評を通して見えてくる上述の問題と合わせて、イスラームと書物の豊かで複雑な関係を解き明かすことに向けて、重要な貢献となることは疑いない。

<参考文献>

R. シャルチエ『読書の文化史：テキスト・書物・読解』福井憲彦訳、新曜社、1992年

(森山 央朗 同志社大学神学部准教授)

堀川徹・大江泰一郎・磯貝健一(編)『シャリーアとロシア帝国——近代中央ユーラシアの法と社会』
臨川書店 2014年 312頁

帝国が多法域空間だったことは近年広く認知されている。ロシア帝国はその最たるものだ。まずロシア帝国はオスマン帝国に似て、宗教共同体への帰属を枢要な行政単位の一つとしたが、ムスリムについては征服時期と地域によって制度に著しい違いがあった。われわれは多法域を中央と辺境・植民地との関係で考えがちだが、ロシア帝国の場合、その中核部すなわちウラル山脈より西側のヨーロッパ部にも多くのムスリムが住み、彼らは概ねロシア人と同様の身分集団に分類されながらシャリーアの適用が認められていた。しかも、その中核に住むロシア人自体でさえ均質ではなく、農民は慣習法に基づく裁判制度を利用していた¹⁾。極めて広大な版図に中核と辺境

1) 帝室ロシア地理学協会の以下の紀要では序文で、辺境の非ロシア人に比べ、中央諸県のロシア人の慣習法の研究